



第 14 回 JPCA 中国ブロック支部学術集会 ポートフォリオ発表会 開催報告

2026 年 5 月 9 日、広島大学霞キャンパス広仁会館において、第 14 回 JPCA 中国ブロック支部学術集会ポートフォリオ発表会を開催しました。

本発表会には 120 名の事前登録をいただき、当日も 100 名を超える参加がありました。専攻医(修了者も含む)に加え、指導医、初期研修医、看護師など、多様な立場から計 30 題の発表があり、日々の実践と学びが共有されました。前半・後半それぞれ 70 分のセッションで構成される長丁場でしたが、各会場では発表ごとに活発な質疑応答が続き、時間いっぱいまで参加者同士が学びを深める姿が印象的でした。職種や経験年数の垣根を越え、それぞれの立場から学びを持ち寄ることで、本学術集会のテーマである「Ensemble Primary Care:みんなで学んで、つくるこれからの医療」を実感する機会となりました。

至らない点もあったかと存じますが、皆様のご協力のおかげで無事に会を終えることができました。ご参加いただいた発表者、審査員、座長ならびに参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

【優秀ポートフォリオ賞受賞者】

- ・國上純生先生(福山南病院)
- ・石山葵先生(美祢市立病院・山口大学総合診療プログラム)

【インスピレーションポートフォリオ賞受賞者】

- ・内藤伸昭先生(山口県立総合医療センター・山口大学総合診療プログラム)
- ・大本夏光先生(はしもと内科)
- ・小寺未来先生(福山南病院)





(広島大学病院 総合内科・総合診療科 原武大介)

JPCA 中国ブロック支部 新専攻医オリエンテーション

令和8年5月10日(日)、午前9時から午前11時まで、広仁会館(広島大学内)で新専攻医オリエンテーションを開催しました。今年度は開催時間を短くしての開催でした(前年度は3時間)。新専攻医3年目の先生を中心として、専攻医の先生方の研修サポートを目的として、情報提供および専攻医同士の交流企画を行いました。前半は各専門医の取得に向けて必要な条件や勉強方法について動画視聴や解説を行いました。家庭医療専門研修プログラムについては、制度の全体像やFami-logの仕組みについての動画(横谷省治先生/専門医研修プログラム運営・FD委員会委員長)を視聴しました。総合診療専門研修については、JGOAL・JOSLERについて、総合診療専門研修専攻医3年目・渡邊凌平先生(広島市立北部医療センター安佐市民病院)に解説をしてもらいました。専攻医に役立つ勉強方法について、AIの活用方法も含め専攻医4年目・樫雄太郎先生(生協浮間診療所)に講義をもらいました。後半は、「専攻医交流会～Ensemble Primary Care～」としてグループディスカッションを行いました。専攻医1年目から指導医までを各グループに配置し、「なぜ総合診療を選択しましたか?」、「不安なことは?先輩はどのように解決したか?」の2つのテーマについてグループ内で意見を共有し、必要に応じて先輩医師からのアドバイスをしました。参加者は28名(うちスタッフ9名)でした。終了時アンケートでは企画全体の満足度は95.4%が4以上(5段階)と非常に高い満足度を示していました。自由記載欄でも特にグループディスカッションについて高い満足度が示されていました。ご参加頂いた皆様および、ご協力頂いた皆様、誠にありがとうございました。

(広島大学病院 総合内科・総合診療科 池田晃太郎)

JPCA 中国ブロック支部指導医講習会

この度、2026年5月10日に広島大学霞キャンパスにて開催された第14回日本プライマリ・ケア連合学会中国ブロック支部学術集会では、「指導医の「問う」を再考する：臨床教育における問いの在り方」というタイトルで「問う」ことをテーマにした指導医講習会を行いました。藤原和成先生、井上和興先生、松本翔子先生、そして吉田秀平先生と私佐藤を担当者として何度もオンライン打ち合わせを重ね、『「問う」を「問う」とはどのような「問い」なのか』などと『問』という文字を盛大にゲシュタルト崩壊させながらも皆で「問い」続けた結果、なんとも滋味深い指導医講習会になったのではないかなと感じています。当日はワークショップ形式で講習会を行い、普段行っている「問い」を省察することを通じて「問い」を構成するものについてお互いに「問い」合って認識を深める、ということを行いました。どの位盛り上がるのか戦々恐々としながら当日に臨みましたが、我々の予想を超えた参加者の皆さんの活発な議論があり、普段から「問い」をしている指導医という立場故の深い「問い」についての考察を聞くことができたかなと感じています。ご参加いただきありがとうございました。

(広島市立広島市民病院 総合診療科 佐藤只空)

m-HANDS 2025 第5-7回の報告

中国ブロックでの指導医養成の報告

出雲家庭医療学センター大曲診療所 藤原和成

岡山家庭医療センター奈義ファミリークリニック 松下明

【m-HANDS-FDF】

(modified - Home and Away Nine DayS – Faculty Development Fellowship)

10年間継続してきた中国ブロックの指導医養成コースです。11年目となる今年度もオンラインとオンサイトを交えて開催します。8月から3月まで、月に1回全8回のコースとして実施しています。

今年度も、JPCA-MLなどで募集して中国地方、四国地方の指導医4名が参加中です。チームを作って様々な課題に取り組んでもらっています。

以下に参加してくれた指導医からの報告を掲載します。

2026年度も引き続き開催を予定しています、ご興味のある方はぜひご連絡下さい。

〈目的〉

中国ブロックの指導医の養成とプログラム運営の質向上を通して、プライマリ・ケアの普及と発展をめざす

〈対象〉

- ・中国ブロックに所属しており、家庭医療後期研修を修了した医師
- ・中国ブロックの家庭医療後期研修に関わる指導医

〈アウトカム〉

Core Competence : Adult Educator(成人学習支援者)

学習者と向き合い、その学びに気を配り、学びの場をサポートできる

教育者の役割と限界を知り、学習者と協同的に学び、生涯学習者を育てる姿勢で関わる

学習者の学びを促進するための理論と技術を適切に用いることができる 参加者と講師による学習共同体の形成を勧め、ブロック内の指導医ネットワークを作る

机上のプログラム作成だけでなく、各現場での仕組みづくりや教育チーム形成ができる

総合診療の魅力やプログラムの魅力を効果的に伝えられる発信力や求心力を発揮できる

ツールの活用や工夫などで独創的で質の高い遠隔教育ができる

第8回 オンライン開催 3月20日(金)

【教育贈与論】

事前課題として教育贈与論に関するブログや論文を読み、それぞれの感想を投稿した。それを元にしつつ参加者全員でディスカッションを行った。

アウトカム基盤型教育(OBE)との比較や、教育贈与と OBE は両立が可能か、などもディスカッションをした。事前課題を一人で行なっている時には訳がわからず難しい印象を受けた。当日のディスカッションをして他の先生の考えや解釈を聞いていく中で、自分の中でも考えがまとまっていったような感覚だった。

m-HANDS が OBE と教育贈与を両立させている、という意見があり、腹落ちしたような感覚になった。(長坂早知)

【卒業制作その後】

昨年を受講生のお二人から卒業制作のその後について伺った。

谷口先生からは多職種向けの指導者研修会の実施について報告があった。卒業制作時点でステークホルダーへのヒアリングなどが終わっており、実現可能性がかなり高いと感じていたが、実際に後継者が生まれるなど効果が上がっている。参加者の選定に課題が残った。

池田先生からはポリクリのカリキュラム改善について報告があった。現場の問題意識から出発し m-hands で学んだことを応用したスマートな手法であった。もともと評価が高かったものの改革であり抵抗されるかと思われたが、ステークホルダーのニーズをうまく拾っていた。学生に事前課題を求めるのはやはり困難があるようだった。両者ともステークホルダーやリソース管理に成功している点が大いに参考になると思われた。

(佐藤龍平)

【ポートフォリオ発表会】

m-HANDS で学んだ内容について、現場で活かしていることを示す事例や体験について、フェローそれぞれで作成し、発表した。

佐藤先生からは「訪問診療車内での教育」、私は「指導法を省察することで教育観の変化に気づけた事例」、豊岡先生は「研修医の特性に応じた指導ができるようになった指導医の成長」、長坂先生は「mHANDS で学んだフィードバックすきるを通して変化した教育に対する姿勢」というタイトルで発表を行った。

m-HANDS を生かして行った活動や、教育活動の成長について振り返ることで、これまでの m-HANDS での成長やこれからの課題が実感でき、卒業式を思わせるセッションだった。

(田中基樹)

【修了式】

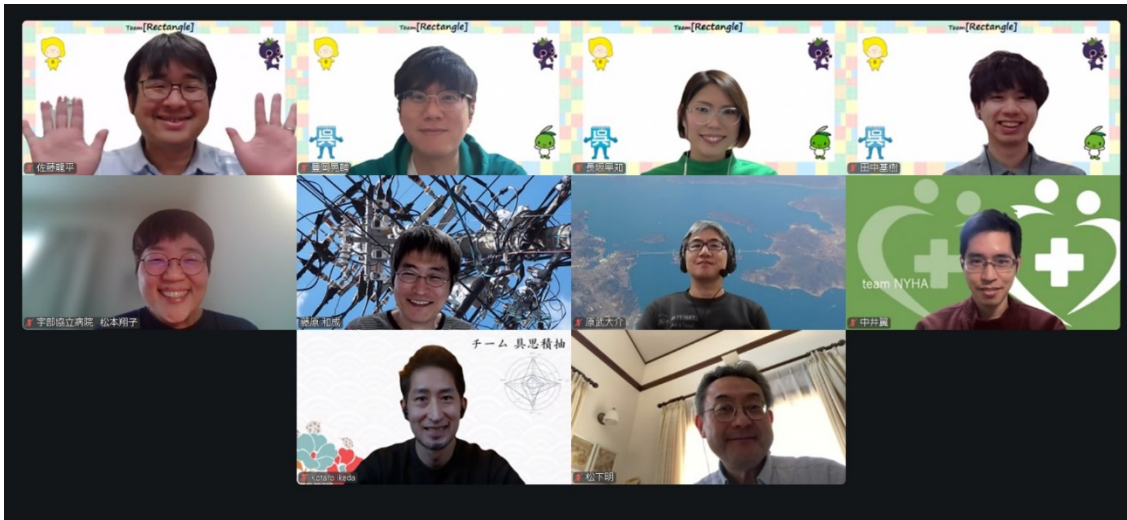
2025 年度の m-HANDS の学びなどについて、修了生から一言ずつコメントを頂いた。その後、ブロック支部長の松下先生より挨拶と祝辞を頂き修了とした。

今年度のフェローも、学習内容だけでなくチームメンバーから、あるいはチームメンバーとともにさまざまなことを学んでくれていることを感じる事ができた。

特に「みんなに会えたことが一番よかったことです」とのコメントでは、m-HANDS が目指しているブロック内の指導医コミュニティ形成にもつながる内容であり、非常にうれしく思った。

また、自分一人では大変だったけれどチームメンバーがいることで学んでいくことができたといったコメントからは、発達の最近接領域について感じる事ができた。

(藤原和成)



中国ブロックでは2026年度もブロック主催の指導医講習会 m-HANDS を開催する予定にしております。ブロック内で教育に関わっておられる学会員の方はぜひご参加ください。詳細はブロック会員のメーリングリストでお知らせをいたします。

第17回 JPCA 学術大会への学生参加報告

この度、初めて学術大会に参加させていただき、たくさんの学びと刺激を受けることができました。学生のポスター発表では、地域や大学、海外など様々な場所で精力的に活動し、それを理論的に咀嚼して発表という場まで結びつけていた、自分と同じ医学生の姿に刺激を受けました。特に各大学の学生サークルによる、健康サロンへの参加や農作業などを通じた住民交流の活動報告は、私自身が普段から関心を持っている内容でありとても興味深く拝見しました。

また、プライマリ・ケア実践における演劇的手法のシンポジウムも非常に印象的でした。演劇という手法が医療を考えるきっかけとなったり、自らが演じ視点が変わることで他者と苦しみを共有できたり、自らの本来のよさや楽しさを他者とともに引き出したりする力を持つことを学びました。エンターテイメントとしての機能だけでなく、医療とも親和性があることを感じ大変興味深く拝聴しました。さらに、演劇によって「いい環境」をデザインすることで、個々人のもつ「分散知」から「集合知」を生成できるというコミュニケーションデザイン論は、医師・患者間や地域でのコミュニケーションの場づくりを考える際に非常に有用であると感じました。

今回得た学びを、これからの大学生活での学習に活かしていきたいと思えます。本学術大会への参加にあたり、日頃よりご指導いただいている先生方、会場でお会いし多方面のお話をさせていただいた他機関の先生方、学生の皆様には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

(山口大学医学部医学科4年 河田真実)

この度、第17回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に参加させていただきました。学会では、先輩方のポスター発表を間近で拝見することができました。実際に発表の場に立ち、質問に答えながら議論を深めていく姿を目の当たりにし、学生のうちからこのような場で自分たちの活動を発信することの意義を改めて感じました。自分自身も将来このような形で発表できるよう、日頃の学びを

積み重ねていきたいという気持ちが強くなりました。

また、総合診療の第一線でご活躍されている先生方や、志の高い専攻医の先生方と直接お話しさせていただいたことは、大変貴重な経験となりました。先生方のお話を伺う中で、総合診療・家庭医療という分野の奥深さや、地域の患者さん一人ひとりに真摯に向き合う姿勢の大切さを実感いたしました。さらに、総合診療に力を入れている病院の取り組みについても知ることができ、研修先や将来のキャリアについて、これまで以上に具体的なイメージを描けるようになりました。

学会参加以前は、将来の進路について漠然とした思いしか持っていませんでしたが、今回の経験を通じて、自分が目指したい医師像や働き方が少しずつ明確になってきたように感じています。このような貴重な機会を与えてくださった先生方、そして学会運営に携わられたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

(山口大学医学部医学科 4年 前田和哉)

この度、初めて日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に参加させていただきました。

土曜日は、二つの教育講演を拝聴しました。救急対応の3種の神器 BEE のお話、小児在宅医療について、子どもが学校に行けるようにした取り組みなどのお話でした。急性期に命を救うことを最優先して治療にあたる救急医療と、生まれた子どもたちが出来るだけ平等に救われるように奔走する小児医療の双方のお話を聞き、自分の医師としてのキャリアの進め方を、今一度考え直す機会となりました。

日曜日は、山口大学や他大学の活動のポスター発表を拝聴しました。先輩方の発表はどれもとても構造的で、私にして下さったインタビューの内容から考察を詳細にされていて、私も来年このような発表をしたいと感じました。

この学会を通して、自身の知識を深めるだけでなく、懇親会などの機会もあり、全国の先生方や他大学の学生と交流することができ、貴重な体験をさせて頂きました。このような機会を与えてくださった皆様、そしてポスター発表についてご指導、ご協力くださった先生方やサークルの仲間々に心より感謝を申し上げます。

(山口大学医学部医学科 4年 足立早紀)

私は今回、初めて日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に参加しました。多くの方々と意見を交わし、新たな視点や学びを得ることのできた、大変刺激的な2日間となりました。

まず、「医療現場における性的マイノリティ」をテーマとした講座に参加し、グループワークでは医療従事者の方々と意見交換を行いました。現場で働く先生方が、実際にさまざまな場面で対応に悩みながら診療にあたっていることを知ることができました。私自身も、「アライとしての意思表示にはレインボーフラッグの掲示やホームページへの掲載など様々な方法があるが、どの段階から表明してよいのだろうか」と率直な疑問を投げかけました。すると、多くの先生方が共感を示してくださり、「以前はアライバッジを付けていたが途中で外してしまった」といった経験も共有してくださった先生もいました。議論を重ねた結果、「最低限の知識を持ち、当事者とともに考えていこうとする姿勢があれば、意思表示をしてよいのではないか」という結論に至りました。性的マイノリティに関心を持つ医療従事者が多くいることを実感できたこと、また多くの先生方の中で自分の意見を発信し、ともに考える経験ができたことは、私にとって大きな学びとなりました。

また、学生による口頭発表も聴講しました。「BMI と服薬量の関連」「薬と漢方の併用」「患者の自己肯定感」など、発表テーマは多岐にわたり、それぞれが興味のある分野について情報を収集・分析し、考察や研究上の課題まで含めて発表していました。研究について十分な知識を持っていなかった私にとって、

同世代の学生が主体的に研究に取り組む姿は非常に印象的で、大きな刺激を受けました。

学生同士の交流も貴重な経験でした。各地域でどのような活動が行われているのか、何に関心を持ち、どのような学生生活を送っているのかを知ることができました。地域と積極的に関わる学生や、私と同じく精神科を志望する学生とも交流することができ、今後の活動や進路を考える上で参考になるとともに、新たなつながりを築くことができました。

学会の最後には、私自身もポスター発表を行いました。活動に取り組んだ経緯や、そこから得られた学びが伝わるよう、多くの人が集まる会場の中でも「大きな声で、わかりやすく伝えること」を意識して発表しました。その結果、「聞き取りやすく、内容が理解しやすかった」といった感想をいただくことができました。他の学生の発表を聞く中で、活動内容そのものに優劣はないと感じました。一方で、発表の伝え方によって聞き手の理解度が大きく変わることも実感し、自分の発表がしっかりと相手に伝わったことを嬉しく思いました。

今回の学会参加を通して、多くのことを考え、学び、刺激を受けました。この経験を今後の活動や学びに生かしていきたいと思います。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

(岡山大学医学部医学科 3年 岡本愛)

この度、第 17 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に学生セッションのポスター発表者として参加させていただきました。2 日間を通して、多くの貴重な学びと経験を得ることができましたので、ご報告いたします。

まず、全国の学生との交流を通じて、多様な活動や考え方に触れることができた点です。私が主宰しているサークルでは、地域に根ざした健康・医学に関する活動やイベントをお行っており、今回の学会ではその取り組みの一つについて発表しました。学生セッションでは、健康教育や学生主体の地域活動など、さまざまなテーマの発表が行われており、それぞれの学生が独自のやり方で活動していることを知ることができました。活動内容だけでなく、参加者の集め方や継続的な運営の工夫などについても学ぶことができ、今後サークル活動を行っていくうえで大変参考になりました。

また、ポスター発表では座長の先生をはじめ、多くの医療従事者や学生の方々に発表を聞いていただき、さまざまなご意見やご助言をいただくことができました。普段活動しているだけでは気づくことのできない視点からのご意見も多く、自分たちの取り組みを客観的に見つめ直す機会となりました。

さらに、発表を通して、自身の活動を第三者にわかりやすく伝えることの重要性も実感しました。5 分という限られた時間の中で活動の背景や目的、成果を説明することは難しかったですが、ご指導して下さった先生の助けもあり自分自身の考えを整理し、活動への理解をより深めることができました。

学会は、成果を発表する場であると同時に、さまざまな職種の方々と交流し、新たな視点や刺激を得られる場であることを強く感じました。今回得られた学びを最大限に生かし、引き続き活動に取り組んでいきたいと考えています。

(岡山大学医学部医学科 5年 三谷峻永)

この度、第 17 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に参加し、かとう内科実習において半年間にわたり末期脳腫瘍患者を担当させていただいた経験について、活動報告として発表いたしました。実際に看取りを数多く経験されてきた医師や看護師の方々からコメントをいただき、自分では気づくことのできなかった視点に触れることができました。

学生セッションのポスターでは、医学生が診察前に就学年齢の患者と関わるスタディーサーフィン研究会や、カフェやキッチンカーを活用して多様な人々が対話できる場づくりに取り組む多職種学生グループ

の活動報告を拝聴いたしました。どの発表も独創的で熱意にあふれており、地域や人とのつながりを大切にしながら活動されている姿が印象に残りました。医療という枠組みにとらわれず、それぞれの立場から地域や社会の課題に向き合う姿勢に触れ、同じ医学生として刺激を受けました。

今回得られた学びや気づきを今後の学習や臨床実習に生かし、より良い医療者を目指して努力を重ねていきたいと思えます。

最後になりますが、このような貴重な学びの機会を下さった皆様、そして本学会での発表にあたりご指導・ご支援をいただいた先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

(岡山大学医学部医学科 6年 桂那月)

この度、5月29日から31日まで国立京都国際会館にて開催されました第17回日本プライマリ・ケア連合学会学術集会に参加させて頂きましたので、ご報告申し上げます。

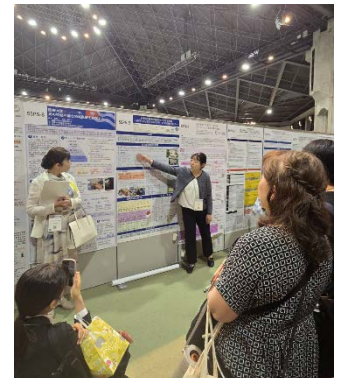
本学会では、学生ポスター発表として、「外科志望者が緩和ケアを学ぶ意義 ～医学生による主体的なグリーフケアを通して～」と題し、昨年度、岡山市内の有床診療所にて経験した在宅緩和ケア実習の内容や、そこから得た学び・感情の変化について発表させて頂きました。

初めての学会発表ではありましたが、多くの先生方や学生の皆様からご意見・ご感想を頂き、大変貴重な学びの機会となりました。学生という立場で、患者さんの死後もそのご家族に関わり続けることには難しさを感じる一方で、患者さんの最期に関わらせて頂いた感謝の思いを伝えたいという気持ちが、グリーフケアを通して継続的な関わりにつながることを強く実感致しました。

また、各セッションや懇親会では、全国の様々な医療機関の先生方や他大学の学生との交流の機会にも恵まれ、新たな刺激を受けるとともに、大変充実した時間を過ごすことができました。本学会を通して、地域医療や総合診療医の果たす役割の重要性についても、より深く実感致しました。

今回の発表にあたり、ご指導下さいました多くの先生方への感謝を忘れず、手術をして終わりではなく、患者さんによりよい最期を届けられるような外科医を目指して、今後も日々精進して参りたいと思えます。

(岡山大学医学部医学科 6年 渡部美)



日本プライマリ・ケア連合学術大会に参加させていただき、非常に良い気づきの場となりました。研究に関しては一般研究口演、学生の研究口演、学生ポスター発表と様々な規模での研究発表があり、治療法・効果に関する具体的な検証から、取り組みの共有まで多くのテーマに触れることができました。同時に、臨床に進まれている先生方を主な対象とした具体ノウハウの共有や、意見交換といった勉強会も多く開催されていました。非常にオープンな空気を作ってくださっていたので、学生として立ち寄っても、気軽に聴講することができました。

それぞれの専門性を持って取り組んでいらっしゃる参加者の皆様の、学生、研修医、その後、という様々な段階を一度に垣間見ることができたのは、タイムトラベルのようで大変興味深く、今後の自身のキャリアを考える上でも必ずヒントになると感じました。

また、医学系の学会に参加させていただくのはこれが初めてでしたので、分野の概観を学ぶためメインシンポジウムも拝聴しました。家族、地域、その人の人生と関わるという非常に濃い「対人ケア」の側面と、同時に政策・経営課題として全体最適、持続可能性を担保することの両面の重要性を感じました。以前は日本といえば高齢化、多くの高齢の方に向けた医療をどう担保するか、という足りないものを増やそう

というイメージでしたが、その先で人口もニーズも減少している中で医療資源をどう分配するかという議論が印象的で、時代の変化を見据えた先見的な視点の必要性を実感いたしました。

ポスターセッションでは、教育、都市、経営、コミュニティ、食といった関連分野との融合的なテーマが多く発表されていて、プライマリ・ケアが人の実社会生活に強く結びついたものであることを感じました。発表者の方々とリアルな場で対話できたことで、コミュニティとしての楽しさや充実感も味わうことができ、将来的に他分野を組み合わせた研究に取り組むことへの興味も湧きました。

全体を通して Take Home Message として印象的だったのは、プライマリ・ケアの、あるいはもっと言えばあらゆる施策を進めていく上で重要な Optimization(最適化), Shared Goals(目標の共有), Bilateral Leadership(双方向のリーダーシップ)という視点です。連携する他の診療科はもちろん、行政、社会、産業や他分野を含めて、人の生活がより健康で豊かになるように、連携していくことが重要なのだろうという学びを胸に、日々の学習に戻りつつ今後に繋げていきたいと思えます。

改めまして、学会参加という貴重な、そしてエキサイティングな機会を賜りまして誠にありがとうございました。当日温かく迎え入れてくださった皆様に重ねて感謝申し上げます。

(岡山大学医学部医学科2年 穴戸翔)

この度、日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に参加し、初めてポスター発表を経験させていただきました。

ポスター発表では全国の医学生や医療者が様々な活動に取り組んでいることを知り、大きな刺激を受けました。それぞれの地域が抱える課題や、その課題に対する独自の取り組みについて学ぶことで、地域特性に応じた医療の重要性を改めて実感しました。また、他大学の学生や先生方と意見交換を行う中で、自分達の活動内容について質問や助言をいただきました。活動の意義や成果を客観的に振り返る機会となり、これまで経験してきたことが非常に貴重な学びであったことを再確認することができました。さらにシンポジウムも聞かせていただき、医師だけでなく多くの専門職が連携しながら地域住民を支えていることを学びました。在宅医療は単に医療を提供する場ではなく、患者さんや家族の生活そのものを支える営みであることを理解し、多職種がそれぞれの専門性を発揮しながら協調することの重要性を学ぶことができました。

今回の経験を通じて得た学びを活かし、より広い視野をもって患者さんと向き合える医療者を目指していきたいと思えます。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった皆様、そしてポスター発表の準備から当日までご指導・ご尽力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

(岡山大学医学部医学科6年 片山和泉)

第17回プライマリ・ケア連合学会学術大会に、学生企画メンバーおよびカフェ企画スタッフとして参加させていただきました多くの刺激を受けた。

学会までの約半年間、学会ジョイントプログラム『総合診療分野の各学会って、何が違うの？～徹底討論！3つの専門性と「ボーダレスな学び」に向けて～』の企画に携わらせていただき、当日は参加者としてセッションを見届けた。準備してきたプログラムが形となり、私たちが込めた思いとともに参加者へ届けられたことに達成感を覚えた。全国の学生とオンラインミーティングを重ねながら企画を作り上げた時間は、自分にはない視点や考え方に数多く触れることができ、学びの多い充実したものであった。

本セッションは、「総合診療分野3つの学会を平等に知る場を作りたい」という企画の目的を達成しただけでなく、私たち学生の率直な疑問に対し、ご登壇いただいた先生方が真摯に向き合ってください、総

合診療分野のあたたかさや魅力を改めて実感する場となった。先生方の「3つの学会はそれぞれ異なる視点から総合診療を捉え発展させている一方で、根底にある価値観は共通している」「どこに所属するかよりも、何をしたいのか、どのような夢を持っているのかが大切である」といったメッセージが特に心に残った。

その後、スタッフとして参加した「学生カフェ企画～医療系学生から全国へ！～メディカフェラリー JPCA 店」では、全国から集まった学生との交流を通して、早速私のしたいことや夢と向き合うことができた。心理的安全性の高い空間で、普段の大学生活ではなかなか話すことのない夢や価値観、違和感について率直に語り合うことができた。対話をする中で、それぞれに共感できる部分があり、私がぼんやりと抱いていた思いや違和感が決して特別なものではないこと、同じような思いを持つ仲間が全国にいることに気付かされた。今回築くことのできたつながりが、近い将来どこかで再び交わり、自分自身の糧となる日が楽しみだ。

学会全体を通して、病院の中にとどまらず、地域・教育・コミュニティづくり・アートなど、多様な分野と医療を掛け合わせながら活動する医師や学生と数多く出会った。自分の関心や問題意識を出発点に、仲間を巻き込みながら形にしている姿は非常に魅力的で、そうした、人々の生活や地域とのつながりの中で健康を支える活動こそが、私の目指す医療であると改めて確信した。今はまだ理想とする医療の形が明確ではないが、今回の学会を通して、自身の関心や価値観を大切にしながら、より多様な世界を知り、学び続けていきたいという思いが一層強くなった。私もいつか、自分らしい形で人や地域に寄り添う医療を実践できる医療者になりたい。

(岡山大学医学部医学科 5年 田中杏依)

この度、第17回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に参加させていただきました。今回が初めての参加であり、貴重な機会をいただきとても感謝しています。

初日は、岩倉駅前たはらクリニックにてサイトビジットに参加し、実際にクリニックを見学させていただくとともに、ご講演を拝聴しました。家庭医療の魅力とともに、その責任の大きさを感じました。患者さんの経過を長期間にわたって見守り、その人の生活や家族、地域との関係も含めて関わっていくことが求められ、医学的な判断だけでなく、その人にとって何が大切なのかを考え続ける姿勢の大切さを学びました。また、地域における精神医療の深い歴史を学び、地域の医療機関が現在の形に至るまでには、その土地の歴史や、そこで暮らしてきた人々、医療に携わってきた方々の積み重ねがあることを学びました。医療を考える際には、その地域がどのような背景を持ち、どのように医療と向き合ってきたのかを知ることも重要であると感じました。

2日目は、若手向け企画を中心に参加しました。初参加の学生どうしで交流をしたり、学会に対する向き合い方を学んだり、総合診療分野に存在する各学会の立ち位置を知ったりと、初参加の学生としてとてもありがたい企画ばかりでした。学会を単に知識を得る場としてだけでなく、普段出会うことのない人や考え方に触れる「越境」の場として捉える視点を学ぶことができました。また、総合診療に関わる複数の学会の違いについて学ぶ中で、それぞれ重点を置く場や視点に違いがありながらも、患者さんや地域に向き合うという点で重なり合っていることを学びました。学生のうちから一つの枠に閉じるのではなく、さまざまな立場の先生方の考え方に触れながら、自分なりの医療像を育てていくことが大切だと感じました。

3日目は、特に総合診療医を目指すにあたってのキャリアを考える1日になりました。総合診療に対する不安や誤解も含めた率直な議論を通して、総合診療の専門性について改めて考えたり、キャリアカフェで、第一線で活躍されている先生と直接お話しする機会をいただいたりと充実した時間を過ごしました。先生ご自身のこれまでの歩みや、実現したい世界に向き合う姿勢を教えていただき、勇気をいただきました。

た。

今回の学術大会を通して、総合診療の豊かさを肌で感じることができました。様々な取り組みとその成果、ロールモデルとなるようなたくさんの先生方の活躍を拝見して、今後の進路を考える上で大きな刺激をいただきました。今回得た学びを日々の臨床実習の中で意識し、患者さんの病気だけでなく、その人の生活や背景にも目を向けられる医学生でありたいと思います。

最後になりますが、このような貴重な学びの機会を支えてくださった日本プライマリ・ケア連合学会中国ブロック支部の先生方、ならびに関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

(岡山大学医学部医学科 6年 小金丸悠太)